

## 呉音資料における漢音去声の上声化

坂水貴司 (広島経済大学)

### 1. 本発表の目的

日本呉音の声調体系は平声 (低平)・去声 (上昇)・入声 (中国語の内破音に由来) の三声体系であったことが知られている (奥村 1961: 28-29 ほか)。このうち去声は 1 拍去声の上声化<sup>\*1</sup> (沼本 1982 [1976]: 500-504) が起こったことと、平安後期以前に発生したという中低形回避によって《去去》→《去上》<sup>\*2</sup> という変化 (沼本 1982 [1976]: 498-500) が起こったことで四声として実現したことが明らかになっている。

1 拍去声の上声化は「語中字かつ去声後→直前の字の声調にかかわらず語中字→語頭字かつ去声後→句頭字」の順で発生したことが指摘されている (佐々木 1987: 205)。また親鸞 (1173-1263) 加點本では呉音字音直読スタイル (以下文体に言及する場合には「〇〇スタイル」と呼ぶこととする) よりも呉音非字音直読スタイルの方で変化が先行していることも明らかにされている (佐々木 2013a: 32)。さらに呉音非直読スタイル中に呉音直読句が引用された場合も、呉音非直読スタイルでの振る舞いと同様に句頭の 1 拍去声字が上声化することが指摘されており、次の例が挙げられている (佐々木 2013a: 30)。

不<sup>フ</sup><sub>(上)</sub> 簡<sup>ケン</sup><sub>(上)</sub> 下<sup>ケ</sup><sub>(平濁)</sub> 智<sup>チ</sup><sub>(平)</sub> 與<sup>ヨ</sup><sub>(平)</sub> 高<sup>カウ</sup><sub>(去)</sub> 才<sup>サイ</sup><sub>(平)</sub> (『唯信抄』西本願寺蔵本 32-5)  
 其<sup>コ</sup><sub>(上濁)</sub> 國<sup>コク</sup><sub>(入)</sub> 不<sup>フ</sup><sub>(上)</sub> 逆<sup>クキヤク</sup><sub>(入濁)</sub> 違<sup>キ</sup><sub>(上)</sub> 自<sup>シ</sup><sub>(平濁)</sub> 然<sup>ネン</sup><sub>(去)</sub> 之<sup>シ</sup><sub>(上)</sub> 所<sup>シヨ</sup><sub>(平)</sub> 牽<sup>ケン</sup><sub>(去)</sub> (『尊号眞像銘文』略本法雲寺蔵本 23-2)

漢音資料でも「日本語として聞き慣れない漢音声調を、当時の日本語声調として自然な型に改変して受け入れ」た資料では 1 拍去声の上声化と《去去》→《去上》(《上去》→《上上》も含むこととする。以下同じ) という中低形回避が行われることが指摘されている (佐々木 2009a [1988]: 565)。この事実からは字音の種類 (呉音か漢音か) に関わらず《去去》→《去上》という中低形回避と 1 拍去声の上声化が発生することが予想される。

ところが中低形回避の方法は呉音漢語と漢音漢語で異なることも指摘されている (加藤 2018 [2015]: 293)。これによると呉音漢語の場合には《去去》→《去上》のような後項を高平化 (上声化) する中低形回避が行われ、漢音漢語の場合には《去去》→《去平》のような後項を低平化 (平声化) することが行われるという。この場合は声調変化に字音の種類が関与していると考えられる。

これらの先行研究から、去声の上声化に関与するのは文体なのか字音の種類なのか、あるいは文体と字音の種類の両方なのかという問いが導かれる。この問題について考えるためには呉音読スタイル中での漢音去声字 (以下、字音形態素のことを「字」と呼ぶ) の振る舞いに着目することが有効であると考えられる。もし去声の上声化に文体が関わるのであれば《去去》→《去上》の中低形回避や 1 拍去声の上声化が認められることが推測される。その一方字音の種類が去声の上声化に関与するので

\*1 古代日本語のリズム単位については定説がなく、等時的な拍が存在したかどうかは明らかになっていない。しかしここで問題にする上声化は現代日本語の拍に相当する形で発生するようであるため、便宜的に「拍」という用語を導入して「1 拍」「2 拍」などと表現することにする。

\*2 加藤 (2018: vii) に従い声調の接続を「声調型」と呼称する。本発表では声調型を《 》で括って示すこととする。

あれば《去去》→《去上》の中低形回避は認められず、また 1 拍去声の上声化の程度は他の呉音漢語と異なっているかもしれない<sup>\*3</sup>。

本発表は次の 2 点を指摘することを目的とする。

- ① 呉音読スタイル中の漢音において、1 拍去声の上声化は発生する。
- ② 呉音読スタイル中の漢音において、《去去》→《去上》の中低形回避が行われる一方、《去去》→《去平》の中低形回避も行われる。

## 2. 研究の方法

### (1) 対象字の抽出

どの字が呉音声調を示すか、漢音声調を示すかということを確認して抽出することは不可能である。そのため近似的な結果を得ることを目指し、呉音資料中で上声点または去声点が加点されている字の中から漢音声調が去声であるものを抜き出し、さらに呉音が去声（～上声）でないものを抽出して対象とする（図 1）。



図 1 調査対象字の選定

#### ① 呉音資料中の上声・去声加点字の抽出

本発表では呉音資料中で上声～去声の揺れがある字を主に対象とする。そのためまず呉音資料の中から、上声点と去声点の加点がある字をリストアップする。資料横断的な漢字音・漢語音データベース（DHSJR ver.20240529、以下「本 DB」とする）のデータセットを使用し、格納される呉音資料を対象として調査する。調査対象とするのは次の諸文献である。

20-001-01,大般若波羅蜜多經\_根津美術館 / 20-043-01,金光明最勝王經音義 / 20-044-01,法華經音\_九条本 / 30-010-01,阿弥陀經\_西本願寺（觀無量壽經を含む） / 30-011-01,浄土論註\_西本願寺 / 30-015-01,浄土三經往生文類\_西本願寺 / 30-018-01,三帖和讃\_専修寺 / 30-019-01,一念多念文意\_東本願寺 / 30-020-01,尊号眞像銘文\_法雲寺\_略本 / 30-020-02,尊号眞像銘文\_専修寺\_広本 / 30-021-01,西方指南抄\_専修寺 / 30-022-01,唯信鈔文意\_専修寺\_正月十一日本 / 30-022-02,唯信鈔文意\_専修寺\_正月二十七日本 / 30-023-01,唯信鈔\_専修寺\_平仮名本 / 30-023-02,唯信抄\_西本願寺 / 30-023-03,唯信鈔\_専修寺 / 30-026-01,四座講式\_元禄版 / 30-026-02,四座講式\_貞享版\_涅槃講式 / 30-026-03,四座講式\_宝曆版 / 30-026-04,四座講式\_大慈院\_涅槃講式 / 30-026-05,四座講式\_正徳版 / 40-045-01,法華經音訓\_東洋文庫 / 50-029-01,浄土三部經音義\_龍谷大学図書館

これらの文献を対象とし、「声点」欄で「上」「去」が含まれる字をリストアップする。データセットの「単字\_見出し」欄が「□」や「=」のものは対象から外した。

\*3 石山裕慈（2014: 8-9）によれば、漢音読の日本漢文では 1 拍去声の上声化が発生しているものの、それを意識した「直しすぎ」も発生しているという。また語頭の韻書上声非全濁字に対する去声点加点例が、語中の韻書去声字に対して上声点が加点される傾向があるという。またこれらの傾向は本によってまちまちであったという。

## ② 漢音声調が去声のものを抜き出す

①でリストアップされた諸字のうち、漢音声調が去声であるものを抜き出したい。しかし全ての字の漢音声調を調べるのは困難であるので、漢音声調の代替として『広韻』を用い、『広韻』去声字と全濁上声字を抜き出す。『広韻』の検索は「Web 韻圖～廣韻検索」を利用し<sup>\*4</sup>、『韻鏡』によって転図上の位置を確認した。『広韻』に含まれない字は『集韻』を利用して『韻鏡』転図上に位置づけた。ただし結果として『集韻』で位置づけた例は次の③の過程で全て除かれ、本発表の対象字にならなかった。

## ③ 呉音去声（～上声）字の除去

②の作業によって得られた諸字を、本 DB の呉音資料を対象に検索して実現声調を調査する。これらのうち、実現声調が「平声の用例数 > (上声の用例数+去声の用例数)」となる字を抜き出した。

以上の作業によって抜き出した字は、漢音を含むほか、語ごとの個別な変化によってたまたま該当したような雑多なものもある程度含むと考えられる。しかし、それらの語を一つひとつ除くことは困難であり、また恣意的な作業になる恐れがあるため、近似的ではあるもののこの手続きによって得られたものを対象にすることとした。

## (2) 用例の分類

抽出した字を対象として、出現状況を調査する。調査した用例を出現環境によって「語頭」（字音直読スタイルの文献では「句頭」）「非中低形回避環境」「中低形回避環境」の三つに分ける。「非中低形回避環境」「中低形回避環境」は対象字に前接する字の声調（前接字が上声・去声→中低形回避環境）によって判定する。対象字の前接字に声点が加点されている場合にはその声点にしたがって判断し、声点が加点されていない場合には前接字の『広韻』声調によった。『広韻』での多音字は漢音資料での出現声調を調査して判定した。

なお出現環境を調査する必要があるため、古辞書や音義は対象から外した。古辞書や音義を対象から外すと、本 DB 内での対象資料は①親鸞の文献（非字音直読・字音直読）、②『大般若波羅蜜多經』、③『四座講式』諸本となる。

この過程で梵語音写例は対象から外した。

## (3) 声点と仮名音注が別の字音の種類を示す場合の扱い

本発表において、仮名音注と声点とは一旦独立に考えることとする。音調は漢音声調で、音形は呉音形である可能性があるためである。たとえば「聖」字について、呉音声調は平声で漢音声調は去声のようである。しかし後に例を挙げるように、本発表の調査範囲では「聖人」という語にのみ《去平》という声調型をとり、漢音声調と一致する一方、「シャウニン」という呉音読を示す仮名音注がついている。呉音読を示す仮名音注があることを重視すると「聖人」の例は対象から外すことが望ましい。しかし、『色葉字類抄』尊経閣文庫蔵三巻本には次のように、漢音形を示すものの「シャウニン」と同じ声調型（《去平》型）の例がある。

聖<sup>(去)</sup>人<sup>(平濁)</sup>（巻下 111 才 4）

このような例があるため、仮名音注と声点とは独立に考えて(1)で述べた作業手順を機械的に適用することとした。

\*4 「Web 韻圖～廣韻検索」 <https://suzukish.sakura.ne.jp/search/inkyō/index.php>（2024年11月24日確認）

### 3. 調査結果

#### (1) 親鸞の呉音非字音直読スタイルの文献

まず親鸞の呉音非字音直読スタイルの文献を調査する。親鸞の呉音非字音直読スタイルでは 1 拍去声の上声化が字音直読スタイルよりも進行していることが指摘されているため (佐々木 2013a: 32)、呉音読スタイル中の漢音去声が上声化しているかどうかを調査するには最適であると考え。上声点・去声点が加点される例数を拍数と出現環境ごとに分けて調査すると、表 1 のとおりであった。

表 1 より、1 拍字は 19 例中 19 例 (100.0%) に上声点が加点され、去声点が加点された例はない\*5。また、2 拍字は 43 例中 4 字 (9.3%) に上声点が、39 例 (90.7%) に去声点が加点されている。拍数によって上声・去声が分化していると考えられ、親鸞の呉音非字音直読スタイルでは漢音でも 1 拍去声の上声化が発生していると考えられる。

この例外になるのは語頭 2 拍字に加点される去声点の 4 例である。これらの 4 例はいずれも漢語サ変動詞の例である。

表 1 親鸞呉音非字音直読スタイルの上声点・去声点

		1 拍	2 拍
上声点	語頭	8	4
	非中低形回避環境	10	0
	中低形回避環境	1	0
去声点	語頭	0	24
	非中低形回避環境	0	7
	中低形回避環境	0	8

順 (上濁) シテ (『三帖和讃』 38-4)

順 (上濁) セル (『唯信抄』 西本願寺 44-1、『唯信鈔』 専修寺 42-3)

順 (上濁) スル (『唯信鈔』 専修寺 15-1)

漢語部分が 2 拍去声の呉音漢語サ変動詞には上声点が加点されることがあることが知られている (佐々木 2012: 346)。本発表の調査で挙げた例は漢音声調であるものの、呉音非字音直読スタイルの中では呉音と同様に、漢語部分が 2 拍去声の漢音漢語サ変動詞も上声化することがあったと考えられる。

次に 2 拍の去声点加点例のうち、中低形回避環境にあるものが注目される。呉音声調の場合中低形回避環境にあれば、2 拍であっても上声化することが予想されるため、これらの例は例外的なものと考えられるかもしれない。しかし、これらの 8 例はいずれも複合語の要素となる語の初頭位置に立つものであり、語頭の位置に準ずる振る舞いをしていると考えられる\*6。

仁 (平濁) 義 (上濁) 礼 (上) 智 (上) 信 (去) (『浄土論註』 上 112-2)

源 (平濁) 空 (去) 聖 (去) 人 (平) (『三帖和讃』 249-2)

源 (平濁) 空 (去) 聖 (去) 人 (平) (『尊号眞像銘文』 略本 72-5)

然 (去) 我 (平濁) 大 (平濁) 師 (上) 聖 (去) 人 (平) (『尊号眞像銘文』 略本 91-3)

大 (平濁) 師 (上) 聖 (去) 人 (平) (『尊号眞像銘文』 略本 91-5、97-5、98-3)

法印聖 (去) 覺 (平) 和 尚 (『尊号眞像銘文』 広本末 25-5 朱仮名)

以上の点をまとめると次のように言えるであろう。まず親鸞の呉音非字音直読スタイルでは漢音の 1

\*5 百分率は小数点第一位まで示すこととし、小数点第二位を四捨五入した。

\*6 窪菌 (1995: 69-70) では先行する研究を整理し、現代日本語において一つのアクセント単位にまとまろうとしない複合語の意味構造があることを述べる。本発表に該当する範囲では、並列構造 (本発表の「仁義礼智信」)、氏名+地位・役職名 (本発表の「源空聖人」「然我大師聖人」「大師聖人」) のような意味構造のものが挙げられる。残る 1 例も「法印聖覺和尚」の例であり、「聖覺」は「法印」とも呼ばれることから、並列的な構造をもっていると考えられる。

拍去声の上声化が発生している。また呉音に見られた、漢語部分が 2 拍去声の漢語サ変動詞の上声化が、漢音でも起こることがある。ただし、中低形回避による《去去》→《去上》については、中低形回避環境にある 2 拍字のうち、複合語構成要素となる語の語頭位置にない例が存在しないため、判断できない。

以下に親鸞呉音非字音直読スタイル文献の全用例を挙げる（表 2）。

表 2 親鸞呉音非字音直読スタイル文献の全用例

	1 拍	2 拍
上声点	<p><b>【語頭】 8 例</b></p> <p>至<sup>シ</sup>徳<sup>トク</sup> (入聲) (『三帖和讃』 41-2、255-1)</p> <p>至<sup>シ</sup>韻<sup>キン</sup> (去) (『浄土論註』 下 85-1 朱筆)</p> <p>義<sup>キ</sup>理<sup>リ</sup> (上) (『唯信抄』 西本願寺 41-4、『唯信鈔』 専修寺 40-1)</p> <p>★堅<sup>ケン</sup>子<sup>シ</sup> (上) (『浄土論註』 上 56-5)</p> <p>★堅<sup>ケン</sup> (上) (『尊号眞像銘文』 略本 18-4、18-5)</p> <p><b>【非中低形回避環境】 10 例</b></p> <p>仁<sup>ニ</sup>義<sup>ギ</sup>礼<sup>レ</sup>智<sup>チ</sup>信<sup>シン</sup> (去) (『浄土論註』 上 112-2)</p> <p>神<sup>シン</sup>智<sup>チ</sup>高<sup>カウ</sup>遠<sup>エン</sup> (上) (『尊号眞像銘文』 広本本 54-2 「遠」の「エン」は朱筆)</p> <p>神<sup>シン</sup>智<sup>チ</sup>高<sup>カウ</sup>遠<sup>オン</sup> (上) (『尊号眞像銘文』 広本本 56-2)</p> <p>靈<sup>レイ</sup>地<sup>チ</sup> (上) (『唯信鈔』 専修寺 7-4)</p> <p>靈<sup>レイ</sup>地<sup>チ</sup> (上) (『唯信抄』 西本願寺 8-1)</p> <p>勝<sup>ショウ</sup>地<sup>チ</sup> (上) (『三帖和讃』 178-4 朱仮名)</p> <p>不<sup>フ</sup>簡<sup>ケン</sup>貧<sup>ヒン</sup>窮<sup>ク</sup>将<sup>シヤウ</sup>富<sup>フ</sup>貴<sup>クキ</sup> (上) (『唯信抄』 西本願寺本 32-5、『唯信鈔』 専修寺本 31-5)</p> <p>電<sup>テン</sup>光<sup>クワウ</sup>朝<sup>テウ</sup>露<sup>ロ</sup> (上) (『唯信抄』 西本願寺 40-3、『唯信鈔』 専修寺 38-5)</p> <p><b>【中低形回避環境】 1 例</b></p> <p>仁<sup>ニ</sup>義<sup>ギ</sup>礼<sup>レ</sup>智<sup>チ</sup>信<sup>シン</sup> (去) (『浄土論註』 上 112-2)</p>	<p><b>【語頭】 4 例</b></p> <p>順<sup>シユン</sup>シテ (上) (『三帖和讃』 38-4)</p> <p>順<sup>シユン</sup>セル (上) (『唯信抄』 西本願寺 44-1、『唯信鈔』 専修寺 42-3)</p> <p>順<sup>シユン</sup>スル (上) (『唯信鈔』 専修寺 15-1)</p> <p><b>【非中低形回避環境】 0 例</b></p> <p><b>【中低形回避環境】 0 例</b></p>
去声点	<p><b>【語頭】 0 例</b></p>	<p><b>【語頭】 24 例</b></p> <p>報<sup>ホウ</sup>ス (去) (『三帖和讃』 66-4、108-4、140-2、237-4 『尊号眞像銘文』 略本 98-5、『尊号眞像銘文』 広本末 4-3-2 朱仮名)</p> <p>報<sup>ホウ</sup>スル (去) (『三帖和讃』 216-4、279-4)</p> <p>後<sup>コウ</sup>悔<sup>クワイ</sup> (去) (平) (『西方指南抄』 759-5 朱声点)</p> <p>上<sup>コウ</sup>皇<sup>クワウ</sup> (去) (平) (『三帖和讃』 258-3)</p> <p>大<sup>ダイ</sup>夜<sup>ヤ</sup> (去) (平) (『浄土論註』 下 64-4)</p> <p>大<sup>ダイ</sup>夜<sup>ヤ</sup> (去) (平) (『三帖和讃』 111-1)</p> <p>大<sup>タイ</sup>巖<sup>カム</sup>寺<sup>シ</sup> (去) (平) (平) (『三帖和讃』 174-2)</p> <p>大<sup>タイ</sup>原<sup>クエン</sup> (去) (平) (平) (『西方指南抄』 190-6 朱声点)</p>

	<p>【非中低形回避環境】 0 例</p> <p>【中低形回避環境】 0 例</p>	<p>タイ (去) カウ 大 綱 (『西方指南抄』 414-6 墨声点)</p> <p>ハイ (去) ケン (平) 拝 見 (『三帖和讃』 137-5)</p> <p>ハイ (去) ケン (平) 拝 見 セシメ (『三帖和讃』 256-4 朱仮名)</p> <p>シヤウ (去) ニン (平) 聖 人 (『尊号眞像銘文』 略本 37-5、45-5、91-4)</p> <p>セイ (去) カク (入) クワ (平) シヤウ (去) 聖 覺 和 尚 (『尊号眞像銘文』 略本 82-4、89-2、90-3、91-4)</p> <p>【非中低形回避環境】 7 例</p> <p>人 (平濁) 外 (去) (『浄土論註』 下 127-3)</p> <p>シン (平濁) クワイ (去) 人 外 (『尊号眞像銘文』 広本本 54-3 朱仮名)</p> <p>ソウ (入) サイ (去) エン (平) メイ (去) 息 災 延 命 (『三帖和讃』 121-2 「エンメイ」は朱仮名)</p> <p>チヨク (入) メイ (去) 救 命 (『尊号眞像銘文』 略本 28-2、50-4)</p> <p>シン (去) ラ (上) コク (入輕) シヤウ (去) ニン (平) 新 羅 國 聖 人 (『尊号眞像銘文』 広本本 83-5)</p> <p>タウ (平) セイ (去) 當 世 (『西方指南抄』 760-1 朱声点)</p> <p>【中低形回避環境】 8 例</p> <p>仁 (平濁) 義 (上濁) 礼 (上) 智 (上) 信 (去) (『浄土論註』 上 112-2)</p> <p>源 (平濁) 空 (去) 聖 (去) 人 (平) (『三帖和讃』 249-2)</p> <p>クエン (平濁) ク (去) シヤウ (去) ニン (平) 源 空 聖 人 (『尊号眞像銘文』 略本 72-5)</p> <p>ネン (去) カ (平濁) タイ (平濁) シ (上) シヤウ (去) 人 (平) 然 我 大 師 聖 人 (『尊号眞像銘文』 略本 91-3)</p> <p>タイ (平濁) シ (上) シヤウ (去) ニン (平) 大 師 聖 人 (『尊号眞像銘文』 略本 91-5、97-5、98-3)</p> <p>ホフインセイ (去) カク (入) クワシヤウ 法印聖 覺 和 尚 (『尊号眞像銘文』 広本末 25-5 朱仮名)</p>
--	--	--

※表中の★は『広韻』全濁上声字。無印のものは『広韻』去声または去声・全濁上声両音字。

## (2) 親鸞の呉音字音直読スタイルの文献

次に、親鸞の呉音字音直読スタイルの文献を対象に調査する。本 DB では、『阿弥陀経』西本願寺蔵本(観無量寿経含む)のみがこれに該当する。

しかし、本発表における調査の条件に該当するものは次の2例のみであった。

二<sup>(上)</sup>十五<sup>(上濁)</sup>由<sup>(上)</sup>句 (『観無量寿経註』 19-4)

高二<sup>(上)</sup>十<sup>(上濁)</sup>五由句 (『観無量寿経註』 234)

これらは「二十五」という数詞で使用されている点が共通している。後に挙げる『四座講式』でも、「二<sup>(上)</sup>十<sup>(入濁)</sup>」(大慈院本 413-4、423-4)、「二<sup>(上)</sup>十<sup>(入濁)</sup>四<sup>(平)</sup>反<sup>(平)</sup>」(大慈院本 420-1)などのように「二十」を含む例において「二」に上声点が加添されていることから、「二十」を含む漢語に特有の音調である可能性がある。『観無量寿経註』で「二」を含む他の数詞ではすべて平声点が加添され、呉音声調と一致している。

千<sup>(去)</sup> 二<sup>(平)</sup> 百<sup>(入緩)</sup> 五十<sup>(入緩濁)</sup> 人<sup>(上)</sup> 俱<sup>(上濁)</sup> (『観無量寿経註』 2-3)  
 菩<sup>(去濁)</sup> 薩<sup>(入急)</sup> 三<sup>(去)</sup> 万<sup>(平)</sup> 二<sup>(平)</sup> 千<sup>(上)</sup> (『観無量寿経註』 2-3)  
 十二<sup>(平)</sup> 由<sup>(上)</sup> 旬<sup>(平濁)</sup> (『観無量寿経註』 21-1)  
 十<sup>(入緩濁)</sup> 二<sup>(平)</sup> 部<sup>(平)</sup> 經 (『観無量寿経註』 56-6)

このように特定の語に起こったと考えられる声調変化の例しか見られないため、親鸞の呉音字音直読スタイルでは、漢音去声の上声化が起こっているかどうか判定することができない。

### (3) 『大般若波羅蜜多経』

それでは、親鸞の文献よりもさらに時代を遡るものではどうであろうか。本 DB が搭載する文献では、呉音直読スタイルの『大般若波羅蜜多経』根津美術館蔵本がこれに該当する。この文献の訓点は移点本であり、移点の原本は院政期の字音を加点したものであることが指摘されており (佐々木 2018: 234)、鎌倉時代初期の親鸞の文献よりも先行する。

この文献における用例数は表 3 のとおりである。

全体では上声点 16 例 (19.8%)、去声点 65 例 (80.2%) であり、上声化する割合が低い。また拍数ごとに見ると、1 拍では上声点 11 例 (44.0%)、去声点 14 例 (56.0%) のように上声点と去声点の割合が近づく一方、2 拍では上声点 5 例 (8.9%)、去声点 51 例 (91.1%) と去声点加点例が優勢である。

表 3 『大般若波羅蜜多経』の上声点・去声点

		1 拍	2 拍
上声点	句頭	1	0
	非中低形回避環境	4	2
	中低形回避環境	6	3
去声点	句頭	2	9
	非中低形回避環境	7	29
	中低形回避環境	5	13

ただし環境ごとに細かく見ても、明確な傾向が見出しにくい。これにはいくつかの理由があると考えられる。

まず一つは、句頭の漢音上声の用例数が少ないことである。句頭の漢音上声は 1 拍字に 1 例見られるだけであるので、句頭の上声点加点において傾向を見るのは難しい。

もう一つは、呉音を含めて文献全体として上声化が起こりにくいことである。1 拍去声の上声化について佐々木 (2018: 232) によれば、句頭の 1 拍去声字の上声化例は朱声点で 17.1%、墨声点で 27.4%にとどまるという。また呉音でも《去去》→《去上》の中低形回避が行われなことがある。たとえば「微密聰<sup>ソウ</sup>敏<sup>ミン</sup>」(454 : 0293b03) という句において、「聰敏」という呉音読語<sup>7</sup> は去声点+去声点が加点されており、語中環境でも《去去》→《去上》の中低形回避が行われていない。

このように文献全体の傾向を踏まえるならば、むしろ漢音去声の上声化は呉音去声の上声化と軌を一にしていると考えられる。つまり、文献全体として時代的・文体的に上声化しやすい文献であれば漢音去声も上声化しやすく、去声をとどめる傾向のある文献であれば漢音去声は去声をとどめることになると考えられる。

ただし本文献において呉音で指摘されているような上声化が漢音に起こっていないかと言えばそうではない。句頭の例として「露<sup>ロ</sup>者得衣」(401 : 0002b04) という例があるほか、非中低形回避環境においても「瞻顧<sup>セム</sup>戯笑<sup>セウ</sup>」(549 : 0827c24) のような例があることから、漢音 1 拍去声の上声化が発生していることは指摘できる。また「常懐慨<sup>カイ</sup>歎<sup>タン</sup>」(335 : 0717c06) の例から、呉音と同様の《去去》→《去上》の中低形回避が漢音でも起きていると考えることができる。

\*7 「聰」は漢音平声軽、「敏」は漢音上声であり、本用例に加点される声点とは異なることも呉音である根拠になろう。この漢音声調の認定は佐々木 (2009b) に載る『群書治要』経部鎌倉中期点によった。

以下、『大般若波羅蜜多經』根津美術館蔵本の全用例を挙げる（表4）。

表4 『大般若波羅蜜多經』根津美術館蔵本における上声点と去声点

	1 拍	2 拍
上声点	<p><b>【句頭】1 例</b>  <small>ロ</small>露<sup>(上)</sup>者得衣 (401 : 0002b04)</p> <p><b>【非中低形回避環境】4 例</b>  <small>フ</small>富<sup>(入)</sup> <small>クキ</small>貴<sup>(上)</sup>自在 (127 : 0699a01)  <small>セム</small>瞻<sup>(上)</sup> <small>コ</small>顧<sup>(上)</sup> <small>セウ</small>戲<sup>(上)</sup> <small>キ</small>笑<sup>(上)</sup> (549 : 0827c24)  <small>ホ</small>恒<sup>(上)</sup> <small>ホ</small>慕<sup>(上)</sup>善友 (562 : 0902b19)            ★<small>シユ</small>驚<sup>(上)</sup> <small>シユ</small>恐<sup>(上)</sup> <small>シユ</small>毛<sup>(上)</sup> <small>シユ</small>豎<sup>(上)</sup> (500 : 0547a14)</p> <p><b>【中低形回避環境】6 例</b>  <small>マ</small>魔所魅<sup>(上)</sup>著 (341 : 0753a14)  <small>チ</small>處<sup>(上)</sup> <small>シ</small>至<sup>(上)</sup> <small>ヘン</small>遍處者 (393 : 1031c16)  <small>チ</small>等<sup>(上)</sup> <small>チ</small>持<sup>(上)</sup> <small>チ</small>等<sup>(上)</sup> <small>シ</small>至<sup>(上)</sup> (468 : 0368a27)  <small>チ</small>等<sup>(上)</sup> <small>チ</small>持<sup>(上)</sup> <small>チ</small>等<sup>(上)</sup> <small>シ</small>至<sup>(上)</sup> (468 : 0368c12)  <small>ニ</small>入滅等<sup>(上)</sup> <small>シ</small>至<sup>(上)</sup> (481 : 0440b15)            ★<small>コ</small>則<sup>(上)</sup> <small>コ</small>爲<sup>(上)</sup> <small>フ</small>孤<sup>(上)</sup> <small>フ</small>負<sup>(上)</sup> (572 : 0954c02)</p>	<p><b>【句頭】0 例</b></p> <p><b>【非中低形回避環境】2 例</b>  <small>リヤウ</small>言行清<sup>(上)</sup> <small>キヤウ</small>亮<sup>(上)</sup> (401 : 0001b18)  <small>キ</small>好淨棄<sup>(平)</sup> <small>キ</small>穢<sup>(上)</sup> (479 : 0428b13)</p> <p><b>【中低形回避環境】3 例</b>  <small>カイ</small>常懷慨<sup>(去)</sup> <small>タン</small>歎<sup>(上)</sup> (335 : 0717c06)  <small>ヒスイ</small>翡翠<sup>(上)</sup> <small>セイ</small>精<sup>(去)</sup> <small>クワ</small>衛<sup>(平)</sup> (398 : 1060c26)            ★<small>セン</small>虚妄撰<sup>(平)</sup> <small>シユ</small>集 (448 : 0262c06)</p>
去声点	<p><b>【句頭】2 例</b>  <small>ホ</small>慕<sup>(去)</sup>多修習 (47 : 0264a18、411 : 0060c26)</p> <p><b>【非中低形回避環境】7 例</b>  <small>カ</small>无<sup>(左)</sup> <small>ケ</small>暇<sup>(去)</sup> <small>ケ</small>教授 (509 : 0600b10)  <small>カ</small>无<sup>(左)</sup> <small>ケ</small>暇<sup>(平)</sup> <small>ケ</small>教授 (547 : 0813b25)  <small>カ</small>墮<sup>(左)</sup> <small>ケ</small>无<sup>(反)</sup> <small>ケ</small>暇<sup>(平)</sup> <small>ケ</small>處 (551 : 0841a12)  <small>ケ</small>无<sup>(左)</sup> <small>カ</small>暇<sup>(平)</sup> <small>ケ</small>之處 (568 : 0932a10)  <small>セム</small>車軍歩<sup>(平)</sup> <small>セム</small>軍 (532 : 0733a04)            ★<small>コ</small>欲顯己<sup>(平)</sup> <small>ケ</small>技<sup>(去)</sup> (452 : 0281a10)            ★<small>コ</small>或作輔<sup>(去)</sup> <small>コ</small>相<sup>(平)</sup> (529 : 0717b13)</p>	<p><b>【句頭】9 例</b>  <small>コン</small>健<sup>(左)</sup> <small>ケン</small>健<sup>(去)</sup> 行三摩地 (36 : 0200b24)  <small>ケン</small>健<sup>(左)</sup> <small>コン</small>健<sup>(平)</sup> 行三摩地 (41 : 0229c23)  <small>セン</small>箭<sup>(平)</sup> <small>セン</small>不墮地 (332 : 0700c04)  <small>セン</small>箭<sup>(去)</sup> <small>セン</small>不墮地 (452 : 0281a10)  <small>セン</small>箭<sup>(去)</sup> <small>セン</small>不墮地 (517 : 0646c20)  <small>セン</small>淨<sup>(去)</sup> 密根深 (381 : 0967c21)  <small>サイ</small>碎<sup>(平)</sup> <small>カウ</small>如<sup>(去)</sup> <small>クワイ</small>穢<sup>(平)</sup> <small>クワイ</small>穢<sup>(平)</sup> (402 : 0008c28)  <small>シユン</small>徇<sup>(平)</sup> <small>シユン</small>利求名 (515 : 0632a11)  <small>テイ</small>剃<sup>(左)</sup> <small>タイ</small>剃<sup>(平)</sup> <small>ラク</small>落<sup>(入)</sup> <small>シユ</small>鬚<sup>(平)</sup> <small>ホチ</small>髮<sup>(入)</sup> (568 : 0935c06)</p> <p><b>【非中低形回避環境】29 例</b>  <small>チ</small>中道衰<sup>(平)</sup> <small>タイ</small>敗<sup>(平)</sup> <small>タイ</small>退敗 (312 : 0591a29)  <small>カウ</small>衰耗<sup>(平)</sup> <small>ハイ</small>退敗<sup>(平)</sup> (312 : 0591b29)  <small>カウ</small>衰<sup>(平)</sup> <small>カウ</small>耗<sup>(平)</sup> <small>ハイ</small>退敗<sup>(平)</sup> (312 : 0592b02)  <small>スイカウ</small>衰耗<sup>(去)</sup> <small>ハイ</small>退敗 (511 : 0610c08)  <small>セン</small>如中毒箭<sup>(去)</sup> (337 : 0729c25)  <small>セン</small>如中毒箭<sup>(平)</sup> (435 : 0189a13)  <small>セン</small>如中毒箭<sup>(去)</sup> (455 : 0295b09、506 : 0580c08)  <small>セム</small>如中毒箭<sup>(平)</sup> (552 : 0844a02)  <small>セン</small>譬如竹箭<sup>(去)</sup> (346 : 0778b28)  <small>カイ</small>常懷慨<sup>(去)</sup> <small>タン</small>歎<sup>(上)</sup> (335 : 0717c06)  <small>キヤク</small>擊<sup>(入)</sup> <small>ソウ</small>奏<sup>(去)</sup> 无量 (394 : 1036c19)  <small>カン</small>心肝<sup>(平)</sup> <small>ハク</small>肺<sup>(去)</sup> <small>シン</small>腎<sup>(平)</sup> (489 : 0485c04)  <small>タイ</small>即<sup>(左)</sup> <small>タイ</small>剃<sup>(平)</sup> <small>シユ</small>鬚<sup>(平)</sup> <small>ホチ</small>髮<sup>(入)</sup> (566 : 0924b02)  <small>クワ</small>漸漸銳<sup>(平)</sup> <small>エイ</small>銳<sup>(去)</sup> (580 : 0998c23)</p>



【中低形回避環境】5例

入市<sup>シ</sup>肆<sup>シ</sup>中<sup>中</sup> (398 : 1062c15)  
 法應試<sup>シ</sup>問<sup>問</sup> (452 : 0282c06)  
 殷<sup>オン</sup>勤<sup>コン</sup>固<sup>コ</sup>請<sup>請</sup> (575 : 0970c21)  
 善御<sup>コ</sup>世間<sup>世間</sup> (572 : 0955c17)  
 ★毀謗拒<sup>コ</sup>逆<sup>逆</sup> (544 : 0801b21)

若如箭<sup>セン</sup> (498 : 0536c08)  
 畢竟如箭<sup>セン</sup> (532 : 0732b28)  
 惡言加報<sup>報</sup> (366 : 0887c13)  
 音聲清亮<sup>リヤウ</sup> (552 : 0847a01)  
 實由<sup>クエン</sup>串<sup>クワン</sup>習<sup>習</sup> (435 : 0189b05)  
 以何驗<sup>ケム</sup>知<sup>知</sup> (541 : 0780b25)  
 刀箭<sup>セン</sup>所傷<sup>所傷</sup> (540 : 0774a26)  
 ★寒熱豐<sup>カン</sup>儉<sup>ケム</sup> (327 : 0674b22)  
 ★寒<sup>カン</sup>熱<sup>ネチ</sup>豐<sup>フウケム</sup>儉<sup>儉</sup> (449 : 0266a09)  
 ★或好廉<sup>レム</sup>儉<sup>儉</sup> (518 : 0650b26)  
 ★世尊肩<sup>セ</sup>項<sup>キヤウ</sup> (381 : 0967c15)  
 ★諸佛肩<sup>ケ</sup>項<sup>キヤウ</sup> (531 : 0726a25)  
 ★如孔雀<sup>シヤク</sup>項<sup>項</sup> (381 : 0968c16)  
 ★如孔雀<sup>シヤク</sup>項<sup>項</sup> (531 : 0727a24)

【中低形回避環境】13例

謂<sup>ケン</sup>健<sup>コン</sup>行三摩地 (52 : 0292a05)  
 有兩<sup>コ</sup>健<sup>ケン</sup>人 (312 : 0593b16)  
 有二<sup>ケン</sup>健<sup>コン</sup>人 (444 : 0242a17)  
 譬如善奏<sup>ソウ</sup> (398 : 1060c09)  
 我當被戴<sup>タイ</sup> (515 : 0630c03)  
 如有以箭<sup>セン</sup> (554 : 0854b03)  
 以手按<sup>アン</sup>之 (570 : 0946a10)  
 露<sup>ロ</sup>泡<sup>ハウ</sup>夢電<sup>テン</sup>雲 (576 : 0979b19、「電」の声  
 点は直下の「雲」に加点)  
 露泡<sup>ハウ</sup>夢電<sup>テン</sup>雲 (577 : 0985c20)  
 俯峻<sup>フシユン</sup>峯巖<sup>フウカム</sup> (587 : 1037a21)  
 不徇<sup>シユン</sup>名譽 (415 : 0082b05)  
 不徇<sup>シユン</sup>名譽 (549 : 0826b23)  
 ★虚妄撰<sup>セン</sup>集 (326 : 0667a19)

※かな：無標は墨点、〔朱〕は朱点

※声点：( )は朱点、【 】は墨点

※表中の★は『広韻』全濁上声字。無印のものは『広韻』去声または去声・全濁上声両音字。

(4) 『四座講式』諸本

親鸞以後の呉音読スタイル文献としては『四座講式』諸本が挙げられる。『四座講式』諸本における例を環境ごとに区分して数えると表5のとおりである。

全体として1拍字に上声点が、2拍字に去声点が加点される傾向が見られる。1拍字は90例(98.9%)に上声点が、1例(1.1%)に去声点が加点されており、2拍の字には16例(21.3%)に上声点が、59例(78.7%)に去声点が加点されている。

表5 四座講式諸本における上声点・去声点

		1拍	2拍
上声点	語頭	58	14
	非中低形回避環境	11	0
	中低形回避環境	21	2
去声点	語頭	0	40
	非中低形回避環境	1	19
	中低形回避環境	0	0

環境ごとに見ても、1 拍の語頭例は全例上声化しており、漢音去声でも上声化が完了していると考えられる。また 2 拍の語頭字についても 14 例が上声化しているものの、この理由については現在のところ不明である。

中低形回避については 2 拍の漢音漢語で中低形回避環境にある上声点加点例が 2 例のみある。「融<sup>(去)</sup>進<sup>(上)</sup>」(宝暦版 002\_014\_b\_04)「衆<sup>(上)</sup>聖<sup>(上)</sup>」(正徳版 001\_032\_b\_05) の 2 例である。「進」字については中低形回避が発生していると考えてよいであろう。「聖」については語頭でも上声化しているため、中低形回避によって上声化したかどうかは不明である。

『四座講式』諸本において注目されるのが、呉音で起こるといわれる《去去》→《去上》の中低形回避の他、漢音で起こるとされる《去去》→《去平》の中低形回避も起こっていると見られることである。

先にも挙げた「融<sup>(去)</sup>進<sup>(上)</sup>」(宝暦版 002\_014\_b\_04) は中低形回避によって呉音で起こる《去去》→《去上》の変化を受けた例として解釈される。一方、「恋<sup>(去)</sup>慕<sup>(平濁)(上濁)</sup>」(大慈院本 408-1、436-3) の「慕」には平声点と上声点が加点されており、《去上》と《去平》の両型を示している。これは呉音で起こるとされる《去去》→《去上》の中低形回避と漢音で起こるとされる《去去》→《去平》の中低形回避を示す音注が、一つの箇所に加点された例と考えられる。試みに『四座講式』諸本における「恋慕」の《去上》と《去平》の用例数を調査すると、《去上》が 6 例(いずれも大慈院本)、《去平》が 64 例(大慈院本を含む諸本)であった。

なお「慕」は『央掘魔羅經』正倉院聖護蔵蔵本の「常慕<sup>ム</sup>修正法」(巻第 2、17 張)という例に呉音形が出てくるものの、後に呉音が失われたと考えられている(沼本 1982 [1979]: 147-151、沼本 2023: 111)。そのため「慕」の呉音声調も同時に失われたとすれば、本発表の例として挙がらないはずである。しかし「慕」が対象字として選定されるのは、《去平》型を示す「恋慕」の例が『四座講式』諸本に 64 例出現したためであり、実際には全例漢音であった可能性が高い。

このほか「面面」という同一の漢音去声字の繰り返しでも、「面<sup>(去)</sup>面<sup>(平)</sup>」(大慈院本 415-5、宝暦版 001\_012\_b\_01、002\_021\_a\_01、正徳版 001\_006\_b\_05、002\_019\_a\_04、貞享版 06 ウ 05)のように、後項を平声化することで中低形回避を行ったとみられる例がある。

『四座講式』諸本における全用例を表 6 に挙げる。

表 6 『四座講式』諸本における上声点と去声点

	1 拍	2 拍
上声点	<p><b>【語頭】58 例</b></p> <p>異<sup>(上)</sup> (宝暦版 002_006_b_02、正徳版 002_006_a_02)</p> <p>下<sup>(上濁)</sup>化<sup>(平)</sup> (宝暦版 001_048_a_04、正徳版 001_038_b_04)、</p> <p>下<sup>(上濁)</sup>化<sup>(平)</sup> (元禄版 14-09)</p> <p>二<sup>(上)</sup>十<sup>(入濁)</sup> (大慈院本 413-4、423-4)</p> <p>二<sup>(上)</sup>十<sup>(フ入濁)</sup> (正徳版 001_006_a_01、貞享版 06 才 01、09 ウ 01 ※字は「廿」)</p> <p>二<sup>(上)</sup>十<sup>(入濁)</sup> 四<sup>(平)</sup> 反<sup>(平)</sup> (大慈院本 420-1)</p> <p>二<sup>(上)</sup>十<sup>(フ入濁)</sup> 四<sup>(平)</sup> 反<sup>(平)</sup> (正徳版 001_007_b_04 ※字は「廿」)</p> <p>二<sup>(上)</sup>十<sup>(シフ)</sup> 四<sup>(平)</sup> 反<sup>(平)</sup> (貞享版 07 ウ 04 ※字は「廿」)</p> <p>二<sup>(上)</sup>十<sup>(フ入濁)</sup> 人<sup>(平)</sup> (正徳版 002_027_b_01)</p>	<p><b>【語頭】14 例</b></p> <p>慨<sup>(上濁)</sup>然<sup>(平濁)</sup> (宝暦版 002_018_a_04)</p> <p>概<sup>(上濁)</sup>然<sup>(平濁)</sup> (正徳版 002_016_b_04)</p> <p>聖<sup>(上)</sup>僧<sup>(平)</sup> (元禄版 13-04、15-08、16-06)</p> <p>聖<sup>(上)</sup>僧<sup>(平)</sup> (宝暦版 001_046_b_02、001_049_a_04、01_050_a_02、正徳版 001_037_a_04、001_039_b_03、001_040_b_01)</p> <p>聖<sup>(上)</sup> (宝暦版 001_049_b_04、正徳版 001_040_a_03)</p> <p>★象<sup>(上濁)</sup>馬<sup>(上)</sup> (宝暦版 001_044_b_01)</p>

地<sup>(上)</sup> (大慈院本 423-3、447\_2、元禄版涅 20-04、羅  
 07-07、舎 07-04)  
 地<sup>(平濁)</sup> <sup>(上)</sup> (大慈院本 426-2)  
 地<sup>(平濁)</sup> <sup>(上)</sup> (大慈院本 433-1)  
 地<sup>(上)</sup> (大慈院本 416-2、宝曆版 001\_015\_a\_04、001\_  
 019\_b\_05、001\_027\_a\_05、001\_040\_a\_03、002\_02  
 8\_b\_02、正徳版 001\_009\_a\_05、001\_013\_b\_01、0  
 01\_020\_a\_04、001\_031\_b\_02、002\_027\_a\_04、貞  
 享版涅 09 才 05、涅 13 ウ 01、涅 20 才 04)  
 志<sup>(上)</sup> <sup>(クワン)</sup> <sup>(平濁)</sup> 願 (元禄版舎 11-04)  
 志<sup>(上)</sup> <sup>(平濁)</sup> 願 (宝曆版 002\_032\_b\_04、正徳版 002\_03  
 1\_a\_04)  
 夜<sup>(上)</sup> <sup>(フ)</sup> <sup>(平濁)</sup> 分 (元禄版遺 06-04)  
 夜<sup>(上)</sup> <sup>(平濁)</sup> 分 (宝曆版 001\_048\_b\_05、002\_006\_b\_03、  
 正徳版 001\_039\_a\_05、002\_006\_a\_04)  
 記<sup>(上)</sup> (元禄版涅 20-01)  
 記<sup>(上)</sup> (正徳版 001\_020\_a\_01、貞享版涅 20 才 01)  
 記<sup>(上)</sup> スル (宝曆版 001\_021\_b\_03)  
 記<sup>(上)</sup> スル (貞享版涅 15 才 02)  
 侍<sup>(上濁)</sup> <sup>(エ)</sup> 衛シ (元禄版遺 09-07)  
 侍<sup>(上濁)</sup> <sup>(エ)</sup> <sup>(平)</sup> 衛シ (宝曆版 002\_010\_a\_04、正徳版 002\_  
 009\_b\_02)  
 衛<sup>(上)</sup> <sup>(平濁)</sup> 護 (宝曆版 002\_011\_b\_05)  
 衛<sup>(上)</sup> <sup>(平濁)</sup> 護 (正徳版 002\_011\_a\_01)  
 未<sup>(上)</sup> <sup>(ソウ)</sup> <sup>(平)</sup> <sup>(ウ)</sup> 曾 有 (元禄版舎 07-03)  
 未<sup>(上)</sup> <sup>(平濁)</sup> <sup>(平)</sup> 曾 有 (宝曆版 002\_028\_b\_01、正徳版 0  
 02\_027\_a\_03)  
 四<sup>(上)</sup> <sup>(サ)</sup> <sup>(平濁)</sup> 座 (元禄版舎 11-02)  
 四<sup>(上)</sup> <sup>(平濁)</sup> 座 (正徳版 002\_031\_a\_02)  
**【非中低形回避環境】 11 例**  
 四<sup>(平)</sup> <sup>(コ)</sup> <sup>(上)</sup> 顧 (元禄版遺 15-10)  
 四<sup>(平)</sup> <sup>(上)</sup> 顧 (宝曆版 002\_017\_a\_04)  
 四<sup>(平)</sup> <sup>(コ)</sup> <sup>(上)</sup> 顧 (正徳版 002\_015\_b\_05)  
 帰<sup>(平)</sup> <sup>(コ)</sup> <sup>(上)</sup> 顧 (元禄版遺 17-01)  
 帰<sup>(平)</sup> <sup>(上)</sup> 顧 (宝曆版 002\_018\_b\_02)  
 帰<sup>(平)</sup> <sup>(コ)</sup> <sup>(上)</sup> 顧 (正徳版 002\_017\_a\_01)  
 霊<sup>(平)</sup> <sup>(上)</sup> 異 (宝曆版 002\_004\_a\_03、002\_004\_b\_01、  
 正徳版 002\_004\_a\_01、002\_004\_a\_03)  
 四<sup>(平)</sup> <sup>(上濁)</sup> 座 (宝曆版 002\_032\_b\_03)  
**【中低形回避環境】 21 例**  
 恋<sup>(去)</sup> <sup>(平濁)</sup> <sup>(上濁)</sup> 慕 (大慈院本 408-1、436-3)  
 恋<sup>(去)</sup> <sup>(平濁)</sup> <sup>(上濁)</sup> 慕 (大慈院本 452-1)  
 恋<sup>(去)</sup> <sup>(上濁)</sup> 慕 (大慈院本 442-2、453-1、456-1)

**【非中低形回避環境】 0 例**

**【中低形回避環境】 2 例**

融<sup>(去)</sup> <sup>(上)</sup> 進 (宝曆版 002\_014\_b\_04)  
 衆<sup>(上)</sup> <sup>(上)</sup> 聖 (正徳版 001\_032\_b\_05)

	<p>カム 感<sup>(去)</sup> 慕<sup>(上濁)</sup>セ (大慈院本 439-1)</p> <p>調<sup>(去濁)</sup> 御<sup>(上濁)</sup> 師<sup>(上)</sup> (宝暦版 001_044_b_01)</p> <p>シン 深<sup>(去濁)</sup> 義<sup>(上濁)</sup> (元禄版 06-09)</p> <p>深<sup>(去濁)</sup> 義<sup>(上濁)</sup> (宝暦版 001_012_a_05、正徳版 001_006_b_04、貞享版 06ウ04)</p> <p>チヤウ 長<sup>(去新濁)</sup> 夜<sup>(上)</sup> (元禄版 02-09)</p> <p>チヤウ 長<sup>(去濁)</sup> 夜<sup>(上)</sup> (元禄版 02-02)</p> <p>長<sup>(去新濁)</sup> 夜<sup>(上)</sup> (宝暦版 001_008_a_01、正徳版 001_002_b_04、貞享版 02ウ04)</p> <p>長<sup>(去濁)</sup> 夜<sup>(上)</sup> (宝暦版 002_023_a_02、正徳版 002_022_a_02)</p> <p>伝<sup>(去濁)</sup> 記<sup>(上)</sup> (宝暦版 002_020_a_01、正徳版 002_018_a_04)</p>	
去声点	【語頭】0例	<p><b>【語頭】40例</b></p> <p>タン 歎<sup>(去)</sup> 息<sup>(入)</sup> (宝暦版 002_002_b_04)</p> <p>歎<sup>(去)</sup> 息<sup>(入)</sup> (正徳版 002_002_b_03)</p> <p>漢<sup>(去)</sup> 朝<sup>(平)</sup> (宝暦版 002_028_a_02、正徳版 002_026_b_04)</p> <p>上<sup>(去)</sup> 古<sup>(上)</sup> (宝暦版 002_016_b_04、正徳版 002_015_a_05)</p> <p>キウ 舊<sup>(去)</sup> 跡<sup>(入軽)</sup> (元禄版 遺 16-09)</p> <p>舊<sup>(去)</sup> 跡<sup>(入軽)</sup> (宝暦版 002_018_a_03、正徳版 002_016_b_04)</p> <p>第<sup>(去濁)</sup> 十<sup>(フ入濁)</sup> 六<sup>(入)</sup> (宝暦版 001_038_b_02、正徳版 001_030_a_02)</p> <p>面<sup>(去)</sup> 面<sup>(平)</sup> (大慈院本 415-5、宝暦版 001_012_b_01、002_021_a_01、正徳版 001_006_b_05、002_019_a_04、貞享版 06ウ05)</p> <p>拝<sup>(去)</sup> 見<sup>(平)</sup> スルニ (大慈院本 448-4、宝暦版 001_028_a_01、正徳版 001_020_b_05、貞享版 20ウ05)</p> <p>拝<sup>(去)</sup> 見<sup>(平)</sup> (宝暦版 002_002_b_04、正徳版 002_002_b_03)</p> <p>ハイ 拜<sup>(去)</sup> 見<sup>(平)</sup> (元禄版 遺 02-08)</p> <p>セイ 聖<sup>(去)</sup> 跡<sup>(入新濁)</sup> (宝暦版 002_011_a_03)</p> <p>聖<sup>(去)</sup> 跡<sup>(入新濁)</sup> (宝暦版 002_011_b_04)</p> <p>変<sup>(去)</sup> シテ (大慈院本 445-5)</p> <p>ケン 建<sup>(去)</sup> 元<sup>(平濁)</sup> (元禄版 羅 15-03)</p> <p>建<sup>(去)</sup> 元<sup>(平濁)</sup> (宝暦版 001_048_b_03、正徳版 001_039_a_03)</p> <p>建<sup>(去)</sup> 初<sup>(上)</sup> 寺<sup>(平濁)</sup> (宝暦版 002_030_a_04)</p> <p>ハン 伴<sup>(去濁)</sup> 侶<sup>(リヨ)</sup> (元禄版 羅 16-04)</p> <p>伴<sup>(去濁)</sup> 侶<sup>(上)</sup> (宝暦版 001_049_b_05、正徳版 001_040_a_04)</p>

	<p><b>【非中低形回避環境】1例</b>  八<sup>(入)</sup> 十<sup>シ</sup> 箇<sup>(入濁)</sup> 年<sup>(去濁)</sup> (大慈院本 408-3)</p> <p><b>【中低形回避環境】0例</b></p>	<p>昧<sup>(去)</sup> 劣<sup>(入)</sup> (宝暦版 001_051_b_04、正徳版 001_042_a_02)</p> <p>讚<sup>(去)</sup> 詠<sup>(上)</sup> (宝暦版 002_023_b_04、正徳版 002_022_b_03)</p> <p>★道<sup>(去濁)</sup> 安<sup>(平)</sup> (宝暦版 001_048_b_02、正徳版 001_039_a_02)</p> <p><b>【非中低形回避環境】19例</b></p> <p>悲<sup>(平)</sup> 歎<sup>(去)</sup> (正徳版 001_023_a_05、貞享版 23 才 05)</p> <p>雲<sup>(平)</sup> 漢<sup>(去)</sup> (宝暦版 002_002_a_04、正徳版 002_002_a_04)</p> <p>石<sup>(入)</sup> 面<sup>(去)</sup> (宝暦版 002_009_b_04、002_013_a_04、正徳版 002_009_a_02、002_012_a_04)</p> <p>祈<sup>(平)</sup> 念<sup>(去)</sup> (宝暦版 002_029_a_01)</p> <p>鳧<sup>(平)</sup> 雁<sup>(去濁)</sup> (大慈院本 413-5、423-5)</p> <p>如<sup>(平)</sup> 在<sup>(去)</sup> (元禄版 羅 02-09)</p> <p>如<sup>(平濁)</sup> 在<sup>(去)</sup> (宝暦版 001_035_a_02)</p> <p>如<sup>(平新濁)</sup> 在<sup>(去)</sup> (正徳版 001_026_b_05)</p> <p>再<sup>(平)</sup> 會<sup>(去)</sup> (元禄版 遺 09-06)</p> <p>再<sup>(平)</sup> 會<sup>(去)</sup> (宝暦版 002_010_a_04)</p> <p>再<sup>(平)</sup> 會<sup>(去)</sup> (正徳版 002_009_b_01)</p> <p>虚<sup>(平)</sup> 妄<sup>(去)</sup> (宝暦版 002_029_a_02、正徳版 002_027_b_03)</p> <p><b>【中低形回避環境】0例</b></p>
--	--	---

※表中の★は『広韻』全濁上声字。無印のものは『広韻』去声または去声・全濁上声両音字。

#### 4. 考察とまとめ

以上各文献の用例より、呉音読スタイル中の漢音去声は呉音去声と同じ振る舞いをする部分と、異なる振る舞いをする部分があることが明らかになった。

漢音去声が呉音去声と同じ振る舞いをする部分は、1拍去声の上声化と《去去》→《去上》の中低形回避である。また、漢語部分が2拍去声の漢語サ変動詞の上声化について、漢音でも起こる例が認められた。これらの漢音去声の上声化は、各文献の呉音去声の上声化の程度に合わせて起こることが、本発表の調査から明らかになった。

その一方、漢音去声が呉音去声と異なる振る舞いをする部分として、呉音読スタイルの中でも漢音語に起こる《去去》→《去平》の中低形回避が行われることがあることも明らかになった。このようなことが起こる要因としては次の二つが考えられる。

まず一つ目の可能性としては、呉音読スタイルという文体の条件の他に、漢音語という字音の種類の条件の両者が働いたということが考えられる。この場合、文体か字音の種類のどちらが声調型選択を決定するかは任意に決められるものと考えられる。

もう一つの可能性としては、《去上》型の中低形回避を基本とする呉音読スタイルの中に、日常漢語の中から《去平》型の語が供給されたということが考えられる。『四座講式』諸本で取りあげた「恋慕」の《去平》型は『新猿楽記』にも見られることが指摘されており(加藤 2018 [2015]: 287)、日常漢語でも《去平》型が使用されたと考えられる。日常漢語の中にこのような声調型が見られるならば、そ

れが呉音読スタイルの中に供給される可能性がある\*8。

どちらの可能性がより妥当なものかを明らかにするためには、呉音読スタイルの文献における《去平》型の漢音語に絞った調査を実施する必要がある。

また本発表で指摘した現象の類例として、漢音読スタイルの中でも 1 拍去声の上声化や《去去》→《去上》の中低形回避が起こることが知られている（佐々木 2009a[1988]: 557-560、石山 2014: 8-9）。呉音読スタイルの文献のみならず、漢音読スタイルの文献も含めて上声化や声調変化を総合的に考察する必要があると考えられる。

#### 依拠資料

『色葉字類抄』尊経閣文庫蔵三巻本：育徳財団編（1926）『尊経閣叢刊 色葉字類抄』育徳財団ならびに前田育徳会尊経閣文庫編（1999）『尊経閣善本影印叢書 18 色葉字類抄一 三巻本』八木書店

『韻鏡』：龍于純（1976）『韻鏡校注』第五版、藝文印書館による。

『央掘魔羅經』平安極初期点正倉院聖語蔵蔵本：春日政治（1984）「聖語蔵御本央掘魔羅經の字音点」『春日政治著作集 第六冊 古訓点の研究』勉誠社、初出九州文学会編（1938）、『文學研究』23、pp.1-18 ならびに築島裕（2015）「正倉院聖語蔵大智度論古點及び央掘魔羅經古點について」『築島裕著作集第 2 卷 古訓點と訓法』汲古書院、初出宮内庁正倉院事務所編（1985）、『正倉院年報』7 による。

『観無量寿経・阿弥陀経註』西本願寺蔵本：平松令三ほか編（2006）『増補親鸞聖人眞蹟集成第 7 卷』法蔵館による。所在は本書柱に書かれた頁数と行数によった。

『群書治要』経部鎌倉中期点：尾崎康ほか解題（1989）『古典研究会叢書 漢籍之部 第九卷 群書治要（一）』汲古書院による。

『西方指南抄』専修寺蔵本：赤松俊秀ほか編（1973）『親鸞聖人眞蹟集成第 5-6 卷』法蔵館による。所在は本書柱に書かれた頁数と行数によった。

『三帖和讃』専修寺蔵本：赤松俊秀ほか編（1974）『親鸞聖人眞蹟集成第 3 卷』法蔵館による。所在は本書頁数と行数による。

『四座講式』元禄版：金田一春彦（2005）『金田一春彦著作集 第 5 卷』玉川大学出版部、初出金田一春彦（1964）『四座講式の研究——邦楽古曲の旋律による国語アクセント史の研究』三省堂による。所在は各写真に付された番号と行数によった。

『四座講式』涅槃講式貞享版：二松学舎大学 21 世紀 COE プログラム中世日本漢文班（2008）『声明資料集 第三輯 二松学舎大学 21 世紀 COE プログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」日本漢文資料 楽書篇』二松学舎大学 21 世紀 COE プログラムによる。所在は丁数・表裏・行数によった。

『四座講式』宝暦版：国書データベース <https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100309444/>（2024 年 11 月 28 日確認）の筑波大学附属図書館蔵本による。所在は冊数、丁数、表裏（a, b）、行数によった。

『四座講式』涅槃講式大慈院本東京大学国語研究室蔵本：東京大学国語研究室編（1986）『東京大学国語研究室資料叢書第 15 卷 古訓點資料集（一）』汲古書院による。用例の所在は本書頁数と行数による。

『四座講式』正徳版：国書データベース <https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100067770/>（2024 年 11 月 28 日確認）の学習院大学日本語日本文学学科研究室蔵本による。所在は冊数、丁数、表裏（a, b）、行数によった。

『集韻』：中華書局編輯部（2005）『古代韻書系列 宋刻集韻』中華書局、初版 1989 年による。

『浄土論註』西本願寺蔵本：平松令三ほか編（2006）『増補親鸞聖人眞蹟集成第 7 卷』法蔵館による。所在は卷（上・下）と本書柱に書かれた頁数、行数によった。

---

\*8 呉音読スタイル文献中でも、漢音読されることが一般的な語は漢音読されることが指摘されている（佐々木 2013b: 7）。このように語を単位として異なる字音の種類が借用されることは起こりうるものと考えられる。

- 『尊号眞像銘文』略本法雲寺蔵本：赤松俊秀ほか編（1974）『親鸞聖人眞蹟集成第四卷』法藏館による。所在は本書柱に書かれた頁数、行数によった。
- 『尊号眞像銘文』広本専修寺蔵本：赤松俊秀ほか編（1974）『親鸞聖人眞蹟集成第四卷』法藏館による。所在は巻と本書柱に書かれた頁数、行数によった。
- 『大般若波羅蜜多經』根津美術館蔵本：佐々木勇（2018）「根津美術館蔵『大般若波羅蜜多經』鎌倉中期点」国際仏教学大学院大学日本古写経研究所編『根津美術館蔵「春日若宮大般若經および厨子」調査報告書』国際仏教学大学院大学日本古写経研究所、pp.257-354 による。所在は巻数と同翻刻で使用される番号によった。
- 『唯信抄』西本願寺蔵本：赤松俊秀ほか編（1974）『親鸞聖人眞蹟集成第八卷』法藏館による。ただし声点は DHSJR の判読によった。所在は本書柱に書かれた頁数、行数によった。
- 『唯信鈔』専修寺蔵本：平松令三ほか編（2007）『増補親鸞聖人眞蹟集成第十卷』法藏館による。所在は本書柱に書かれた頁数、行数によった。

### 参考・引用文献

- 石山裕慈（2014）「漢音声調における上声・去声間の声調変化——日本漢文の場合——」『國文論叢』48、神戸大学文学部国語国文学会、pp.1-12
- 奥村三雄（1961）「呉音の声調の一性格」『訓点語と訓点資料』18、訓点語学会、pp.17-32
- 加藤大鶴（2015）「去声字の低起性実現から考える漢語アクセントの形成プロセス」『訓点語と訓点資料』135、訓点語学会、pp.18-36
- 加藤大鶴（2018）『漢語アクセント形成史論』笠間書院
- 窪園晴夫（1995）『語形成と音韻構造』くろしお出版
- 佐々木勇（1987）「呉音一音節去声字の上声化の過程」『鎌倉時代語研究』10、鎌倉時代語研究会、pp.185-208
- 佐々木勇（1988）「日本漢音に於ける声調変化——岩崎本『蒙求』を中心に——」『新大國語』14、新潟大学教育学部国語国文学会、pp.27-39
- 佐々木勇（2009a）『平安鎌倉時代における日本漢音の研究 研究篇』汲古書院
- 佐々木勇（2009b）『平安鎌倉時代における日本漢音の研究 資料篇』汲古書院
- 佐々木勇（2012）「親鸞加點本に呉音声調の年代差は無い」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部（文化教育開発関連領域）』61、広島大学大学院教育学研究科、pp.344-350
- 佐々木勇（2013a）「鎌倉時代における呉音声調の位相差——親鸞加點本を資料として——」京都大学文学部国語学国文学研究室編『国語国文』82(1)、中央図書出版社、pp.15-33
- 佐々木勇（2013b）「親鸞自筆『西方指南抄』における漢音について」『国文学攷』219、広島大学国語国文学会、pp.1-12
- 佐々木勇（2018）「根津美術館蔵春日若宮『大般若波羅蜜多經』の字音点について」沖森卓也編『歴史言語学の射程』三省堂
- 沼本克明（1976）「呉音の声調体系について」『国語学』107、国語学会、pp.1-15
- 沼本克明（1979）「大般若經読誦音に於る漢音混入について」『鎌倉時代語研究』2、鎌倉時代語研究会、pp.109-135
- 沼本克明（1982）『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』武蔵野書院
- 沼本克明（2023）『日本漢字音の歴史 新装版』東京堂出版（初版 1986）
- 「Web 韻圖～廣韻検索」<https://suzukish.sakura.ne.jp/search/inkyō/index.php>（2024年11月28日確認）
- 「資料横断的な漢字音・漢語音データベース」<https://dhsjr.w.waseda.jp/>（2024年11月28日確認）

### 【付記】

本発表は科学研究費補助金「資料横断的な漢字音・漢語音データベースの拡充と運用に向けた基礎的研究」（基盤研究 B・研究課題番号: JP22H00665）の助成を受けたものです。